

# ちよろず 千万の せんぼつしゃ ささ 戦没者に捧ぐ

## ■ 楽曲データ

歌詞：大谷嬉子 作詞

楽曲：清水脩 作曲

発表：－

初演：「戦没者追悼音楽式典」 1953年4月18日

初出：－

管理番号：M1400

## ■ 創作の経緯

「戦没者追悼音楽式典」（1953年）にて初演。作詞者の大谷嬉子（第23代勝如上人裏方）は弟を沖縄戦で亡くしており、「私も遺族のひとりです」と述べて「戦没者に捧ぐ」と題する和歌を詠んだ。それを歌詞に作曲されたのが、本作品と《み光りの》である。

## ■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第3巻収録

底資料：『合唱曲集 響流 混声編』 カワイ楽譜音楽研究部 1972年

比較資料：『合唱曲集 響流 男声編Ⅰ』 カワイ楽譜 1971年

校訂の詳細：特記事項なし

## ■ 解説

### ◆ 作品について

大谷嬉子前お裏方（当時・第23代勝如上人裏方、1918～2000）の和歌に、清水脩が作曲した作品です。1953（昭和28）年4月18日、仏青・仏婦・日校・学生生徒の共同勤修になる「戦没者追悼音楽式典」において、《み光りの》とともに発表されました。

当時の様子を伝える『本願寺新報』の号外によりますと、朗詠の後、混声合唱によって演奏されたようです。また、式典全般は「従来の形式を一新して、立体的な形式に編み出したもので、荘重さのなかに流麗に式典が運ばれた」といいます。

作曲の清水脩は、1911（明治44）年、大阪・天王寺の真宗大谷派寺院に生まれました。父は、四天王寺舞楽の楽人もつとめました。大阪外国語学校フランス語科（現・大阪大学外国語学部）を卒業。在学中は、グリークラブの指導者でした。後に、東本願寺研究生の待遇で東京音楽学校選科に入り、橋本國彦らに作曲を学びました。戦後は、全日本合唱連盟で合唱指導に尽力し、理事長も

務めました。

1947（昭和22）年、日本宗教音楽協会を組織し、交声曲《蓮如》《平和》《樹下燦々》のほか、多くの仏教讃歌を發表しています。特に、龍谷大学や大谷大学の男声合唱団、龍谷混声合唱団とは親交が厚く、これらの合唱団のために数々の合唱曲を作曲しました。戦後の東西両本願寺における仏教音楽の創作・普及に大きく寄与した作曲家の一人です。私たちが法座や集いのたびごとに歌う《恩徳讃》が、もっともよく知られています。

#### ◆歌い方について

まず、歌詞を何度も口に出して朗唱し、和歌の表面的な意味だけではなく、その奥に秘むところを十分に領解しておくことが大切です。発表当時の『本願寺新報』には、音楽は「インド古典のリズムを基調としたもの」とあります。ゆったりとしたテンポで、心身の奥底から歌いあげてゆく、といった心構えが必要です。

- ①出だしのフレーズは、はっきりとした強い気持ちで歌いましょう。8分音符の動きをなめらかに。
- ②2小節目から始まる上昇音階「いのち」は、何度も練習し、音程を正しく取るように。また、なめらかに歌えるようにしましょう。12小節目からの「いやあらた」も同じ。
- ③3・4小節目「いのちの上に」、13・14小節目「いやあらたなり」は、息づぎをしないで歌えるようにしましょう。
- ④7小節目の「ソ」→「ミ♭」の音程を十分に注意して。次の「悲しき」という部分が歌のポイントです。透明な声で、しっかり歌いましょう。
- ⑤9・10小節目は、同じ言葉を繰り返しますので、よく味わって。10小節目の「き」は、母音の響きが浅くならないように、しっとり。
- ⑥15小節目「み墓辺の」が曲の山なので、12小節目からここに向けて、ずっとクレッシェンド（だんだん強く）していきます。
- ⑦21小節目3拍目「も」は、あまり大きくならないように注意し、歌い収めましょう。音程にも気を付けて。

#### ◆用途

戦争犠牲者の追悼法要や物故者の追悼、永代経法要などで歌うとよいと思います。

解説執筆：大分哲照（御堂演奏会指揮者 福岡教区西嘉穂組明圓寺住職）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 19（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第144号収録）を加筆・修正のうえ、転載。